III.　儀礼歌

III. 儀礼歌

ダヴィドコヴォ村ではイスラムの二大祭日である犠牲祭（курбан байрам / Kurban Bayramı、別名、「大祭」）と断食明けの祭（рамазан байрам / Ramazan Bayramı、別名、「小祭」）は、今では、採録歌にうかがわれるような広場で村びとが参加して祝う祭りではなくなっている。多くは家族行事として祝うだけなので、儀礼歌として掲げた採録歌は、記憶を頼りに歌われたものである。歌の分類については、歌い手やインフォーマントの情報によった。そのため、ここでは「儀礼歌」を、特定の儀礼場面とはかかわりなく、広くこの祭日に歌われた歌という意味で用いることにする。

同様のことは、婚姻儀礼歌についても言える。ダヴィドコヴォ村の南西約 10km に位置するペトコヴォ村で 19 世紀末に行われていた結婚式についてフリスト・ポップコンスタンティノフ Хр. П. Константинов は、「結婚式の慣わしの多くには、各場面にふさわしい歌が伴っている。決められた歌を正しく歌うために、歌い手 песнопойки として 4 人の娘たちが選ばれる。娘たちは花婿の親族で、婚姻儀礼歌をすべて知っていなければならない」[1] と記している。

この記録からも推察されるように、かつて結婚式は、折々にコロスの歌う歌が場面を進行させて行く古典ギリシア劇にも、また花婿と花嫁の家屋敷や双方をつなぐ村の大通りで繰り広げられるページェントにも比せられるものであった。ポップコンスタンティノフの記録では、結婚式は木曜日に始まり、土曜日のゴデシ[2]や嫁取り行列と続き、翌日曜日の婚礼の祝宴で頂点に達し、新郎新婦が一段落するのは翌週の土曜日だったという。その各場面で、決められた歌が歌われたのである。

ロドピ地方のこのような盛大な結婚式は 20 世紀に入ると次第に簡素化され[3]、それに伴って婚姻儀礼歌も、いわば切り売りされて、ポプレルカ попрелка やメジェ меже と呼ばれる若者たちの寄合いや宴席に舞台を移すことになった。両大戦間期以降に刊行されたロドピ地方の民衆歌謡集では、ポップコンスタンティノフが婚儀で採録したものと同様の歌が恋愛歌に分類されているのも[4]、この経緯と儀礼歌の変遷を物語っている。ここでは上記のような事情を考慮し、掲載した儀礼歌を体系的に編集し、提示するには数も少ないので、儀礼全体における位置づけなどの解説は最小限にとどめ、かつての儀礼歌の再現と考察は後日にゆずることにする。

---

1. СбНУ, кн. 9, стр. 39.

2. ゴデシの歌については、I-6 歌の注解を参照。

3. вж. Родопи, стр. 190.

4. Стоин-1934. この歌謡集が、後のロドピ地方民衆歌謡集の項目立てのモデルとなり、НПСР や НПРК などに受け継がれている。

1. Да разшените байрама

1	пукайте	< пукам. ここでは「鉄砲を打ち鳴らす」の意味。かつて祭礼や結婚式があると景気づけのために銃が打ち鳴らされた。このような風習は、現在でも中東イスラム圏で観察される。
	казъм	= кузум < kuzum (T). вж. РБЕ, т.8. 子供や若者にたいする好意的な呼びかけ。
2	еннъшком	< еднъжком < веднъжком < веднъж. 副詞 веднъж に造格派生の様態・手段を表す副詞形成接尾辞がアナロジーで付加されたもの。срв. ОБГ, стр. 318.
4	расшените	< расшенем = разшеня. срв. РР, кн. 2, 'расшеневам'「陽気にする」。< şen (T).
	байреман	*чл.* < байрем = байрам. 近づきつつある祭を、この語 байрам を遠称の後置冠詞形にして特定している。срв. ГСМС, стр. 39-40.
6	лечка	*умал.* < лека. вж. **лек** в БЕР, т. 2. 副詞として「ゆっくりと」の意味で用いられている。срв. НГ, т. 3, лечка-полечка < лека-полека.
8	цала	= цяла.
10	оники	< oniki (T). 「12」。

この歌と次に掲載する歌は、犠牲祭と断食明けの祭りで歌われた。村ではこの 2 つの祭りをまとめてバイラム祭と呼び、そこで歌われた歌を「バイラム歌 Байрямски песни」と呼び習わしている。

毎年、イスラム暦のラマダン月に行われる「断食明けの祭り」とその 70 日ほど後のズー・アルヒッジャ月に行われる「犠牲祭」は、ブルガリア・ムスリム（ポマク）の若者と娘たちがいつも待ち焦がれていた祭日であった。彼らが知り合う少ない機会だったからである。

南西ブルガリアのチェピノ Чепино 村（現ヴェリングラド Велинград 市に合併）では、「ポマクの若者と娘たちの多くは、バイラム祭で見初めあって好きになった。祭りの時にはポマクの娘たちは隠れたり、スカーフで顔を被うこともしなかった」[1] という。また中部ロドピ地方のチェペラーレ Чеперале では、「年に 2 回のバイラム祭の日に、集落の高い木に縄を結んでブランコが作られた。 ..... 女性が

一方の端に座ると、男性がもう一方の端に座った。娘や婚約者の女性がブランコに乗ると、彼女の恋人や婚約者は鉄砲を打ち鳴らした [2]。男たちの格闘技、つまり相撲は、よく小太鼓が打ち鳴らされて始まった ...」[3] という。

かつてこの地方の羊飼いたちは狼や盗賊対策にピストルや鉄砲を携行していたので、祭りや結婚式など祝い事があると、V-C-10 歌にも歌われているように、しばしば景気づけに銃が打ち鳴らされた。その音が、代わり映えのない藪(けい)に区切りをつけて若者や娘たちの心を駆りたて、祭りの晴の雰囲気盛り上げることになった。

---

1. Попконстантинов-1892, в СбНУ, кн. 7, 1892, стр. 43.
2. ブランコ遊びと求愛とについては、IV-B の解説、特に脚注の 1 を参照。
3. Ст. Н. Шишков, Помашки обичаи от с. Чеперале, Рупчоско, СбНУ, кн. 16-17, 1900, стр. 384.

2. Байрам няма да има

1	байрем	= байрам.
2	нема	= няма.
4	летнаха	*аор.* < летна. вж. **летне**, *св.* в РБЕ, т. 8 и **лети**, *несв.* в РР, кн. 2.「（雨や雪が）降り出す」。
5	са зберат	= се сберат < сбера се.
7	летвичкине	< летвичък. *умал.* < летав. вж. РР, кн. 2.「緩やかな坂の」。
8	равничкине	< равничък. *умал.* < равен. ここでは修辞的な複数形 дворове にかかる美称の epithet として用いられている。

年に 2 度のバイラムは、太陰暦に基づくイスラム暦によって日にちが決まるので、毎年 10 日ほど日にちが後ろにずれてゆく。そのため真冬にバイラム祭がくることがある。この歌は、そんな時期に雪が降って、娘たちや若者が楽しみにしていた祭りに集まれないと歌う。

東方正教会の復活祭が、春の一定の時期の範囲内で移動するのと異なって、バイラム祭は季節を越えて移動するので、季節がずれるとブランコ遊びも行えなくなる。それは、若者たちにとって重要な求愛の機会が失われることを意味し、彼らの落胆は大きかった。

そのため、農耕牧畜社会にあっては、このような「神の事情」によって決まる祭日のほかに、5 月 6

日のフドレレス Hıdırellez や 11 月 8 日 Kasım カッスムが、農事の画期という「人の事情」による祭りとして盛大に祝われる。なかでもフドレレスは、今でも農村に暮らすムスリムのあいだで、ブルガリア・ムスリム（ポマク）、トルコ・ムスリム、スンナ派、アレヴィ派を問わず、村をあげての祭りとなる場合が多く見受けられる。これらの祭日は、農事暦に基づくものでほぼ立夏と立冬に当たり、同じ日に聖ゲオルギと聖ディミタルの聖人の日としてキリスト教徒によっても祝われた。祭礼は、イスラム的、キリスト教的に潤色されてはいるが、それら公式の宗教以前にさかのぼる土着的な儀礼が核になっており、そのため 20 世紀にいたるまでロドピ地方の季節祭はシンクレティックな色彩を濃厚に維持することになった [1]。インフォーマントの伝えるところでは、ダヴィドコヴォ村のような共住村では、この祭日になると宗教の別なく互いに祭日を祝う挨拶を交わし、親しい人たちの間では宗教が異なっても互いに祭りのご馳走を分かち合って、喜びをともしたという。

---

1. Родопи, стр. 116.

3. Да погиздим малката мома

1	ключковене	< ключкове < ключък. *умал.* < ключ. 「鍵」。ロドピ方言のこの指小形については вж. УРГ, стр. 19.
2	шерен	= шарен. ша > ше の音変化については方言解説を参照。
8	гюмюшено	< гюмюшен < гюмюш < gümüş (T). вж. PP, кн. 2.「銀の」。
11	е	*мест. 3 л. ж. ед. вин.* = я < тя.
13	са фатим	= се хватим < хватя се.
14	душманене	*чл.* < душмани < душамн < düşman (T). ここでは、「（若い 2 人の結婚を阻もうとする）敵」の意味。
17	йем	= хем.
	мойне	< моине = моите. 音節数を合わせるために и の代わりに й が用いられている。
	твойне	< твоине = твоите.

インフォーマントによれば、採録歌は婚礼歌で、花嫁に化粧や飾りをつけている時に歌われたという。НПРК, № 1348, № 1349 に見られるように、ブルガリア・ムスリムとキリスト教徒のどちらの歌い手か

らも類似の歌が採録されている。実際の結婚式では、「малкана мома（小さな娘）」と歌われている個所に、結婚式に臨む娘の名前が入るという。

花嫁の着付けは、多くの村では、結婚式当日の日曜日に花婿側から遣わされた女たちがするのが慣例であった[1]。例えばブルガリア・ムスリムの暮らすザバルド Забърдо 村では、「花婿の側から、楽隊と一緒に彼の近親者の女や男たちが、嫁に着付けをするためにやってくる。花嫁の部屋に入るのは両親のいる娘たちで、彼女たちが着付けをしてやる。その後でご馳走が出される。そこで、彼らは、花婿の家に戻って、準備がすっかり整ったので花嫁を取りに行くようにと伝えた」[2]という。

着付けの終りに「花婿の若者の妹と一緒に 2 人の娘たちが、花嫁の娘にスカーフを巻くため彼女の部屋に入ってくる。..... 花嫁の象徴であるスカーフを巻くのである。..... スカーフを巻くと、娘はすでに花嫁になるのである」[3]。これは、19 世紀末のペトコヴォ Петково 村でのキリスト教徒の結婚式の記録であるが、ブルガリア・ムスリムの場合もほぼ同様で、同じ頃の記録によると、西ロドピのチェピノ村では、花婿となる若者の仲間や親族たちが花嫁となる娘の家に集まり、彼女に若者が買った新しい晴れ着を着せ、飾り紐を何本も縫いつけて垂らしたフェス帽を娘にかぶせ、この飾り紐で顔を被うと着付けが終わる。これがベールの役割を果たすのである。一方、若者の家では、花嫁を迎える車の準備が整うと、Хайде, брей, ша варвим за гелината（さあ、嫁を迎えに行こう）と誰か声をかけて屋敷から出発する。このようにして結婚式が始まると、どちらの家族でも娘は、以降「ゲリナ гелина（嫁）」と呼ばれることになる[4]。

---

1. ペトコヴォ村では花婿側の嫁取りの一団が花嫁の家にやってくる土曜日（вж. СбНУ, кн. 9, стр. 42）に行われれたとする 19 世紀後半の記録がある。同じ頃、西ロドピのチェピノ Чепино 村では、ブルガリア・ムスリムの結婚式は日曜日あるいは木曜日（вж. СбНУ, кн. 7, стр. 47-48）に行われると伝えられている。宗教は異なれ、どちらの場合も宗教的祭日の前日に結婚氏が行われている。
2. Забърдо, стр. 140-141.
3. СбНУ, кн. 9, стр. 42.
4. СбНУ, кн. 7, стр. 48. 村びとたちは、公式宗教であるイスラムやキリスト教による婚儀を経る前の嫁迎えの儀式が始まった段階で、花嫁候補の娘をこのように「嫁」と呼んだのは注目にあたいする。通例、嫁迎えの儀式の翌日に行われていた公式宗教による婚儀は、当の結婚に公的な最終的な認可を与えるものであったが、人びとには、この嫁迎えの儀式で結婚はすでに成立したと考えられていたのである。次の掲載歌の註解を参照。

4. И няма скоро да дойда

1	да	вж. ГСМС, стр. 64. 中部ロドピ方言に特有な用法で、‘нека; по-добре беше.’の意味で用いられている。
	карала	< кара ме. вж. **кара** в НПСР, стр. 532.「叱る」。
4	солкова	= толкова. вж. ГСМС, стр. 47.
5	дено	= дето. вж. РР, кн. 2.

この歌は、次掲歌とともに、婚礼泣き歌 сватбени кордене とされる[1]。婚礼泣き歌は、ロドピ地方や南西ブルガリアのピリン地方では、第一次世界大戦前後までは婚儀には欠かせないもので、キリスト教徒ブルガリア人にもブルガリア・ムスリムにも等しく認められた。通例、木曜日に嫁入り道具の準備が始まった時から、日曜日に花嫁が導かれて実家を出て行くまでの期間に歌われた[2]。

採録歌と同種の歌は、チョクマノヴォ Чокманово 村では、教会での結婚式の加冠の儀式に出かける前に、花嫁の実家で歌われた[3]。この村から直線で約 16km ほど北西にあるソリシタ Солища 村では、教会での加冠の儀礼が終わって花婿の家に向かう嫁取り行列で歌われたと伝えられている[4]。

東方正教会の用語で「加冠式」と呼ばれる結婚式の戴冠儀式は、「婚配の機密」—カトリックでいう「婚姻の秘跡」— の重要部分をなす。教会での加冠式は、ロドピ地方では比較的新しいものだったようだ。ポップコンスタンティノフは、19 世紀後半のペトコヴォ村の婚姻儀礼の記録で、「日曜日の朝に加冠が行われるが、これは家で行う。最近、一部の若者が教会で加冠を受けるが、村びとはこれを良い目で見ない」[5]と記している。村びとは、司祭たちを家に呼んで加冠式を行ったのである。

ロドピ地方では「16 世紀から 17 世紀の頃、聖職者や修道僧が来ることは極めてまれで、... このような『司祭』がちょっとでも姿を見せると、洗礼、加冠、弔いなど一連のキリスト教の儀式が行われた。...でなければ、人びとは遠くの地や修道院に行って『司祭』を探さなければならなかった」。墓の土を取って誰かに託し遠方の教会や修道院で儀式をしてもらう葬儀に比べて、「... 加冠はもっと難しかった。新郎新婦は遠くの教会や修道院に行って聖職者や修道僧を探さなければならなかった。指輪を交わし、2 人の前で十字を切って、『神の僕の若者と神の僕の娘に結ばれん ... 』と言葉を唱える［世俗の］人物がいたという古い言い伝えがある」。村には常設の教会や礼拝堂はなく、一般に、「18 世紀末までキリスト教の儀式は各自の家で行われていた」のである[6]。

そのため 1830 年代になってロドピ地方のあちこちで教会が建設されても、そこでの儀式は村びとにとってはまだ馴染みではなく、加冠の儀式は、当時まだ家庭内の行事と考えられていたのである。「家

で加冠の儀式が行われる場合には、名親たちкумовеが、自分たちで緑の枝を編んで花を飾った冠を持って来た」という[7]。ちなみに、田舎の教会で加冠式に金属製の冠が用いられるようになるのは、1920年頃からのことであった[8]。

これらの点を考慮すると、この歌は、本来、家で加冠式を行って花嫁が生家に別れを告げるときに歌われたものと考えられる。この「家庭内の行事」であった加冠式が教会で行われるようになると、教会での加冠式をどのように解釈するかで、この歌の歌われる順番に混乱が生じ、村ごとの違いが現れたのである。花嫁が実家から出発する別れの時に歌われる場合は、教会での加冠式は「家庭内の行事」と切り離されて考えられていた。一方、教会での加冠式後に歌われる場合は、花婿側の親族だけで花嫁の実の父母は参加しなかったので[9]、歌われているに母親に別れを告げることは不可能なはずだが、ここでの加冠式も伝統的に行われてきた「家庭内の行事」の延長と考えられたために、そのような場面でも歌われたのであろう[10]。

4行目以下は、通婚圏について村びとが共有している通念に基づいた表現で、通念と逆のイメージを誇張することで、嫁がせることに同意した両親への複雑な思いと、彼らから離れて新しい生活に向かう娘の不安を描き出している。もちろん、「遠方」とは必ずしも物理的な距離である必要はなく、幼少のころから一緒に暮らしてきた家族から離れるという情緒的・心理的な距離をも意味している。ロドピ地方、広くブルガリアの農村では、出生地の村内での結婚が理想とされていた。特に娘の場合がそうで、村内に適当なパートナーの若者が見つからないと、慣習法の規定に反して3親等の村内の親族との結婚も例外的に認められる場合もあったという[11]。

---

1. 婚礼泣き歌については、Н. и Д. Кауфман, стр. 354-365 参照。
2. НПСР, стр. 86, № 24 歌の注を参照。
3. Чокманово, т. 2, стр. 341-432.
4. Солища, стр. 340.
5. СбНУ, кн. 9, стр. 49.
6. Момчиловци, стр. 106-107.
7. Солища, стр. 340.
8. Вакарелски-1977, стр. 478.
9. Родопи, стр. 180 および Чокманово, т. 2, стр. 336.
10. これとの関連で、結婚式の花輪について触れたジェーン・ハリソン Jane E. Harrison の言葉を引いておくのも無駄ではないであろう。「われわれはギリシア人が草木の輪冠を被るという奇態な風習に耽りやすい民と考える傾きがある。

..... 古代ギリシア人は芸術的または詩的だったから輪冠をかぶり枝を手に持つのではない、それは彼らが祭式家(リテュアリスト)だったからであって、春を連れ戻し夏を迎え入れることができるようにというのでそうしたのである。今日ギリシアの花婿は花嫁と同じ花輪をかぶる、それは彼の結婚が新生命の始まりであるように、また彼の『妻はおほくの実をむすぶ葡萄の樹のごとく、彼の子輩(こら)は彼の筵に円居(まどい)して、橄欖の若樹のごとく』（詩篇 128）になるようにとのためである」（ジェーン・E・ハリソン 著、佐々木理 訳、『古代芸術と祭式』ちくま文庫、178 頁）。加冠式は、キリスト教だけのものではなく、それ以前の異教儀礼から受け継いだものと習合されたからこそ村に教会のなかった時代にも結婚式の儀礼として存続したのである。

11. ロドピ地方では、他の地域と同様に、いとこ同士の結婚は、原則的に近親相姦として慣習法で禁じられていた。この地方における親族間の結婚のタブーとその実際については、Родопи, стр. 149-150 参照。

5. Щеида далечко

1	немой	немой は、主として南ブルガリアで用いられる禁止表現。вж. БД, стр. 247.
	ни	= не.
2	пододривай	< пододривам.インフォーマントの説明では、подигравам、つまり「からかう、あざける」の意味。вж. НПРК, стр. 966. 「侮蔑する、怒らせる」。
3	пишман	< pişman (T). стана пишман 「後悔する」。
6	барчина	вж. РР, кн. 2. 「丘、山」。
8	госка	= гостенка. вж. РР, кн. 2. < гостка < гост.
	до	*съкр. инф.* < дойда.

歌詞に違いが認められるが、前掲歌と同工異曲である。

この歌は、婚姻儀礼歌として女性が歌うのを常としたが、НПСР, № 25 に採録されているヴァリアントは、1953 年にブルガリア・ムスリムの男性が宴席で歌ったものである。恐らく、この儀礼自体が衰退してゆくのと平行して、宴席で男性にも歌われるようになったものと考えられる。

このヴァリアントは私たちの採録歌とほぼ同一内容の歌詞に続けて、次ぎのように歌われる、

Мночко щиш да са надееш	祝いのパンをたずさえてお呼ばれに、
да си ти дойда госчица,	お呼ばれにきておくれと、

госчица с фудуличица,	あなたは［娘の私に］とてもお望みだけど、
пък мене нêма да има !	でも、あたしはだめだわ！

「祝いのパン」と訳した фудуличица は фудулка の指小形である。結婚式を終えて、花嫁が、親類・縁者や名親にお客に行くときに準備する小型のパンで、表面に木の判 просфоник を押して印をつけたものをいう。

採録地に近いペトコヴォ村などでは、嫁の初里帰りは、вôзвратка と呼ばれて婚姻儀礼に組みこまれ、結婚直後の金曜日に行うのを習わしとした[1]。採録歌もこれを踏まえている。

---

1. СбНУ, т. 9, стр. 52.

6. Сега те, китко, оставям

1	китко	*зват.* < китка. ここでは標準語で用いられる「花束」の意味ではなく、ロドピ方言の「（花束にもちいる）一本の茎から生えたいくつもの花、庭に植えられた花」の意味で、娘が若者のために好んでこの花を用いて花束を作ったのでこの語が用いられている。вж. PP, кн. 2.
2	млочко	< мночко. *умал.* < много. ロドピ方言に特有な指小形については、вж. БЕР, т. 4.
	праших	< праша. вж. PP, кн. 2. 「（作物の生育を促すために根のまわりの）土を耕す、掘り起こす」。
4	вечеро	*нареч.* = вечер. вж. PP, кн. 2.
6	кърпечка	= кърпичка. *умал.* < кърпа.
12	йе	*мест. 1 л. ед. имен.* < я = аз.
	идам	= ида. 次行では ида が用いられ方言と標準語が混用されている。
15	нах	= на. 中部ロドピ方言。前行では на が用いられ方言と標準語が混用されている。
	нах килимче	ここでは「（馬にかけられた）カーペットの上に（乗って）」の意味。
16	дено	= дето < където.

ヴァリアントは、中部ロドピ地方のブルガリア・ムスリムの村で広く採録されている。歌い出しの部

分に若干異なるものもあるが、歌われる内容はほぼ同じで、１）結婚式のホロー（チェーン・ダンス）や（Стоин-1934, № 201、 НПРК, № 1400）、２）花嫁を花婿の家へ連れて行くときに（НПРК, № 1399）に歌われる。さらに、ほぼ同一内容の歌詞に続けて次ぎのように歌われているものも知られている。採録数では、この種のものも多い。一例として НПРК, № 1392 の歌を引いてみる。

Пък я далеко ще идам,	でも、あたしは遠くへ行くの
през Даръдере ще минам,	ダラデレを通って、
във Енуздере ще идам	エヌズデレへ行くの
Райфу млада невеста	ライフのもとへ若いお嫁に行くのよ、
на конче и на килимче.	敷物をかけたお馬に乗ってね。
— Излези, Раиф, погледни	「ライフ、出てきて見てごらん、
каква невеста ти водим.	どんなお嫁さんをお前に連れてきたかさ」
— Ох леле, майчо, не ща я,	「ええ、なんだい、かあちゃん、嫁など欲しくないよ
че ми е малка, глупава.	俺には小娘で、ものも知らないねんねじゃないか」

このタイプの歌が歌われる場面は、主に、１）結婚式の日に娘の家の宴席で（НПСР, № 29）、２）花婿の家に向かう花嫁行列で（НПРК, № 1394）の２つである。ソリシタ村では、花嫁が花婿の家に到着し、彼女が舅と姑やクムと呼ばれる婚礼の立会人に手洗い水をかけるポドリフ подлив（清め）の儀式が終わった後、バグパイプの伴奏でこの歌が歌われるという。記録には、Китко, зълена, кравêна と最初の一行しか記されていないが、状況からして後者のグループの歌と考えられる[1]。

先のグループの歌が、実家を離れて婚家に向かう花嫁を主人公にしているのとは対照的に、後者のグループの歌では、嫁を迎える母親とパートナーとなる息子も登場する「もじり歌」になっている。

この歌では、前半と後半の接合がしばしば唐突で、歌われると場所と場面にも一致していない場合が多い。また、後半だけ独立して歌われたものも採録されている（НПРК, № 1393）。これら諸点を勘案すると、前半と後半は、本来、別々の歌で、１）のように婚家へ向かう花嫁行列が出発する前に花嫁の立場にたって歌われていた前半部分が、花嫁が婚家に到着した後で宴席その他の席で新婚夫婦をからかう「もじり歌」として発達したのであろう。もちろん、そこには、19 世紀末から始まる婚礼の簡略化と、婚礼が村の行事から個人の行事へと変化していった事情も影響していたに違いない。

ところで、китка は、語注にも記したとおり、ロドピ地方では「一本の茎から生えたいくつもの花」の意味で、採録歌では「花束を作るために庭園に植えた花」と解釈できる。この花を用いて作られたもう一つの китка、つまり花束は、後に掲載する多くの歌にも見られるように、恋する娘と若者にとって欠かせない小道具であったが、婚姻儀礼でも重要な役割をはたした。ソリシタ村での儀礼の記録を引こ

う。この儀式では、花婿が花嫁の家に実際に「嫁を取りに行く」古形が保たれている。

嫁取りの一隊が歌う歌が聞こえると、花嫁の介添人や仲間の娘たちは、「悲しげな歌を歌い、急いで花嫁の家の門を閉める。花婿は、（窓や天井や梯子など）あらかじめ考えていた入口を探さなければならない。..... そこで花婿は、上に登ると扉を『打ち破って』花嫁に近づいてゆき、仲間の娘を押しのけて彼女の手をつかみ、（従順な連れ合いとなるように）花嫁を足で踏みつける。銀貨の入った刺繍模様の巾着で花嫁を何度か叩くと、花嫁のかたわらに立つ。花嫁の母親が 2 人に花束をつけてやると、門が開かれて介添人たちが入ってくる。花嫁の両親は彼らを迎え、手ぬぐいを贈る」[2] という。ここで初めて新郎と新婦が会い肩を並べて立つのである。

このように、花束は、若者との出会いから愛の成就と結婚まで、機会あるごとに重要な役割を果たした。そして、娘は、その時々に特別な思いを込めて花束を結んだのである。婚家へと旅立つ娘にとって、花束を結んだ庭の花 китак との別れは、それが植えられている実家との別れであり、若者との出会いに心ときめかせた若き良き日々との別れでもあった。

---

1. вж. Солища, стр. 346. この記録では、ポドリフの儀式は花嫁が婚家に到着した当日に行われると記録されている。20 世紀初頭の記録では、その翌日の朝に行われたと記されている。 вж. П. Апостлов, Родопска сватба, в СбНУ, кн. 21, 1905 г., стр. 24-25.
2. вж. Солища, стр. 335-336.

7. Ела се свива, развива

1	развива	развива とするテクストは他に見当たらない。意味も通りにくくなる。歌い間違いであろう。1920 年代の採録になる СбНУ, т. 39 に掲載の歌以来、その後の採録歌も全て превива と記録されている。
2	са	= се. この再帰代名詞短形は、行末の прощава と関連づけて用いられている。アクセントを持たない前接的なこの代名詞は動詞との結びつきが強く、通常はその間に前置詞句が割って入ることはないが、民衆歌謡、特にロドピ地方の民衆歌謡ではこのような現象がしばしば観察される。
4	рожделна	< рожделен. вж. РР, кн. 2. 「産みの、実の」。
5	дет	*отно. мест.* = дето.
	млочко	< мночко. *умал.* < много.

6　сърце　　вж. НПСР, стр. 539. 「お腹、子宮」。

この歌は、婚礼泣き歌で、ヴァリアントは西ブルガリアにも広く流布しているが、ロドピ地方から広まったとされる[1]。

インフォーマントによれば、娘が婚家に向けて出発する結婚式のクライマックスの場面で実家の屋敷の庭で歌われる。家庭での結婚式が珍しくなり都会の式場で行われるようになった現在でも、この歌は、結婚式の定番としてロドピ地方には欠かせない歌である。

рода голяма は、「大いなる一族」の意味である。血のつながりを基本とする男系親族関係を род と呼び、ブルガリアではこれが家族関係の基本となる。結婚した娘は、嫁ぎ先の家では子供が生まれるまで完全には一族のメンバーとは見なされない。嫁は他者として婚家に入って行くのである。そのため、採録歌で用いられる род（一族）、рожделна（生みの）、сърце（お腹、子宮）といった語はこれから嫁いでゆく家と実家との対比を一層浮かび上がらせることになる。

贅言を尽くすよりも、この場面を知悉した地方誌家の記録を引いておく。場所はダヴィドコヴォ村から直線で西に約 20km ほどの所に位置するソコロフツィ Соколовци 村である。

「父親は、花嫁を引き連れて出てくると、年上の介添人に娘を渡し、介添人は花婿の名親に彼女を引き渡す。そこで名親は、花嫁と花婿を一緒にする。実家から出るときに花嫁は、あらかじめ敷かれておいた白物 бêлко と呼ばれる手織りの布の上を歩まねばならない。この布地は［端を］緑のもの зêленко に、冬ならば『生きた』木に掛けておくものとされている。その場所の門の手前で『別れ』が行われる。結婚式全体を通して最も感動的な雰囲気にあふれた場面である。別れをするために、父が、続いて母が、そして年齢順に妹と弟が、次いで近親者がゆっくりと背を伸ばして歩み出る。歌い手と楽隊は、他の地方でもよく知られた哀切な別れの歌をもう奏ではじめている。

Ела се вие превива,	もみの木はしなってたわんで、
мома се с рода прощава.	娘は一家に別れを告げる。
Прощавай, родо голяма,	「さようなら、大きな一家、
и ти рожделна майчице,	そして、ねえ、実の母さん、
дето си мене носила	九ヶ月あたしを
девет месеца на сърце	おなかに抱え、
и три години на ръце !…	三年手の中に抱いてくれた人！…

近親者は泣いている[2]。花嫁は、近親者が許しを求めて差し出す手を（白い布の下で）両手で受けと

め、身を屈めてその手を額につけるとこれに口づけする。このように、次々とすべての人と別れをつげる。この哀切な儀式が終わると、花婿側の 2 人が花嫁を抱き上げて彼女のために連れてきた馬に乗せ、花嫁の膝に膝がけをすると、行列は教会に向かって出発する…」[3]。

---

1. вж. Н. и Д. Кауфман, стр. 359. さらに、БНТ, т. 5, стр. 494 のヴァカレルスキ Хр. Вакарелски の解説を参照。
2. 興味あることに、Н. и Д. Кауфман, стр. 359-360 によれば、実家から出発する花嫁を歌ったロドピ地方の婚姻儀礼歌のなかには、葬礼泣き歌と同じタイプのメロディーが見られるという。
3. Соколовци, стр. 322-323.

8. Пукни се, тресни, момина майко

1	тресни [са]	< тресна се. вж. НГ, т. 5.「（感情が）爆発する」。ここでは、先行する動詞で再帰代名詞短形対格が用いられているので、後続のこの動詞では、それが省略されている。
4	планнина	= пладнина. дн > нн の音韻変化はロドピ方言に頻繁に観察される（БД, стр. 217）。
6	йесно	= ясно.

採録歌は、花嫁が実家から出て行くときに歌われる婚礼歌である。中部ロドピ地方の各地で、主にブルガリア・ムスリムの歌ったものが採録されている。キリスト教徒の歌ったものもあり、その一つが、НПСР, № 42 に掲載されている。脚注によれば、この歌は、娘が実家から出て教会に向かう際に歌われた。それも特に、娘の母親が、気に染まぬ縁組にしぶしぶ同意した時など、この歌をあてつけに歌ったという[1]。ダヴィドコヴォ村と関係の深いマナスティル Манастир 村では、娘が両親や親族と別れをつげ、教会に向かう段になると、花婿側の若者たちがこの歌を歌ったという[2]。

1930 年にダヴィドコヴォ村で採録された歌[3]は、長女を手放す両親に向かって歌われている。

Пукни са, тресни, момина майко,	娘さんのお母さん、思いの丈をあふれさせ、ぶちまけなさいよ、
Момина майко, момин бубайко,	娘さんのお母さん、娘さんのお父さん、
Момина майко, момин бубайко,	娘さんのお母さん、娘さんのお父さん、
Дил ми ти взьохме първоно дете.	俺たちはあんたの初子をお嫁にしたのですからね。

また、略奪婚の場面を歌い込んだ歌[4]も採録されている。20 世紀初頭においても略奪婚はまれではなかったが、ここでは、実際の略奪婚ではなく婚姻儀礼の一部として取り込まれて、嫁いでゆく娘を見送る母親の心情を映すかのように、「娘さんのルサを盗んだんだよ」と表現されている。この歌は、嫁取り行列の一団が、楽隊を従えてにぎやかに集落の大通りを練り歩いて花嫁の家に向かうときに歌われた。

Пукни са, тресни, момина майко,	娘さんのお母さん、思いの丈をあふれされ、ぶちまけなさいよ、
украдохмъ тъ Руса дъвойкя,	俺たちはあんたの娘さんのルサを盗んだんだよ、
и жа я водъм в нашана кôща,	娘さんは俺たちの家に連れて行くからな、
в нашана кôща, нашанъ дворъ.	俺たちの家に、俺たちの屋敷にな。

このように、出だしは同じでも、娘を手放す母や父の心持を基礎にし、歌われる時と場に応じて新しい歌詞や儀礼的要素を取り込みながら、結婚式という一大イベント全体の構成にバランス良く組み込まれるように歌詞が改変され、次々と新たなヴァリアントが生み出されてきたのである。

---

1. НПСР, стр. 91.
2. Манастир, стр. 191.
3. СбНУ, т. 39, № 187.
4. Солища, стр. 334.